様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：１２１０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２０４５４

研究課題名（和文）文法化における機能範疇の出現方法の分類と統合に向けての研究

研究課題名（英文）A study on the classification and unification of the manner of the emergence of functional categories

研究代表者
西山　國雄（NISHIYAMA, kunio）

茨城大学・人文学部・教授

研究者番号：７０３０２３２０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：日本語における連体形（準体言）と形式名詞の発展とラマホロト語において接辞が一致形態素へ発展した過程で成果があった。前者では活用形全体の中で連体形を位置づける論文を出版し、国際学会で発表した。活用語尾と機能範疇の関係を明確にして、連体形が古語の段階で既に範疇に曖昧（CPまたはDP）であると分析した。そして「の」はその曖昧性を引き継いだのであって、「の」自体が文法化を経たのではない、という説を出した。後者では通言語学的に接辞と一致形態素の区別は連続的で、前者から後者への文法化が広く観察されることを基に、第二位置接辞から致形態素が発達したと仮定し、中間的な特徴を持つ言語があることを示した。

研究成果の概要（英文）：Regarding the development of adnominal forms in Japanese, I argued that its categorial ambiguity between CP and DP is observed already in premodern Japanese. Thus, its descendant "no" simply inherited the categorial ambiguity of the adnominal form, and it did not undergo grammaticalization. Regarding the development of agreement markers in Lamaholot, I hypothesize that they originate in second position clitics. I based the argument on the language that have elements with hybrid features.

研究分野：言語学

キーワード：文法化　機能範疇　日本語　ラマホロト語　連体形　接辞　一致　所有名詞句

１．研究開始当初の背景

文法化とは、言語変化の過程で動詞や名詞などの語彙範疇が、助動詞や決定詞などの機能範疇に変化することを指す。文法化の研究は80年代後半以降、まず機能主義言語学や類型論の分野で盛んになり、最近は日本語学や生成文法でも文法化を扱うようになってきている。生成文法では主に機能範疇の出現方法が注目され、筆者の知る限りでは、これまで３つの出現方法が提案されている。

(1) 移動によるもの（移動モデル、Roberts and Roussou (2003)）

(2) 構造拡張によるもの（拡張モデル、Gelderen (1993)）

(3) ラベル変更によるもの（ラベル変更モデル、Whitman (2000)）

(1)のモデルでは、動詞(V)が助動詞(T)に移動することを基に、文法化により移動先に直接生成(merge)されると仮定する。一方(2)のモデルでは、もとは動詞句(VP)だけの構造だったものの上に、時制要素や節(TP)が加わるという構造拡張を経て、機能範疇が出現する。(3)のモデルでは移動も構造拡張も仮定せず、句構造のラベルが変化したと考える。具体的には動詞連続構文で、２番目の動詞が前置詞に変わる過程で、動詞から前置詞へとラベルが変化したと提案する。

２．研究の目的

本研究の目的は、文法化における機能範疇の出現方法を分類し、それらの統合の可能性を探ることである。本研究の２つの柱は、日本語とラマホロト語における文法化現象の分析と、類型論の文献を基にした通言語的視点からの文法化の考察である。

３．研究の方法

本研究の２つの柱は、日本語とラマホロト語における文法化現象の分析と、類型論の文献を基にした通言語的視点からの文法化の考察である。扱う日本語における文法化現象は連体形（準体言）と形式名詞の発展と複合動詞の後項の助動詞化であり、ラマホロト語における文法化現象は接辞が一致形態素へ発展した過程である。これらの現象は他の言語でも見られ、他言語との対比により当該言語の共通点と相違点が浮かび上がる。それを考察することで、どの部分が各言語に特有で、どの性質が一般言語に普遍的なものかがわかってくる。

４．研究成果

日本語における文法化現象は連体形（準体言）と形式名詞の発展については、活用形全体の中で連体形を位置づける論文を出版し、国際学会で発表した。活用語尾と機能範疇の関係を明確にして、連体形が古語の段階で既に範疇に曖昧（CP または DP）である、という分析を提示した。そして「の」はその曖昧性を引き継いだのであって、「の」自体が文法化を経たのではない、という説を出し、従来の見解と異なる立場を示した。

そしてこれを更に発展させ、範疇の曖昧性は、２つの機能範疇の融合によるという説を、フィリピン諸語の指示詞の証拠に基づき提案した。具体的には D が C を支配している構造から、２つの素性を合わせ持つ１つの範疇への変化である。これは機能範疇出現の第４の方法で、これまで提案されている３つと合わせ、比較、統合がより困難になるが、今後の新たな課題として取り組みたい。

ラマホロト語における接辞が一致形態素へ発展した過程については、通言語学的に接辞と一致形態素の区別は連続的で、前者から後者への文法化が広く観察されることを基に、東インドネシアのスラウェシ島に見られる第二位置接辞からラマホロト語の一致形態素が発達したと仮定した。そして小スンダの言語などに中間的な特徴を持つ言語があることを示した。

ここで問題となるのは、この変化がオーストロネシア語族の中での変化（内的要因）によるのか、パプア言語との接触によるのか（外的要因）ということである。前者はラマホロト語がスラウェシ島の言語とは別の下位分類に属するという通説（中央マラヨポリネシアの仮説）により説明される。一方後者の場合は系統発達は関係なく、近年出てきた、中央マラヨポリネシア下位分類は存在しないという仮説と合致する。これに関しては、日本言語学会の公開シンポジウムの企画、司会を務め、言語地域をテーマとして取り上げた。個人発表では、一致形態素の発達には内的要因と外的要因共に関わっていると考えられる理由を述べた。特に外的要因の場合は、言語接触が機能範疇の出現に果たす役割というものに注目する必要を示唆した。

以上の問題に加え、ラマホロト語の所有名詞句と助動詞の問題にも注目した。ラマホロト語では所有者は主要部名詞の前に来るが、これは他の地域のオーストロネシア言語とは逆の順序であり、パプア言語のそれと一致する。また助動詞が動詞句の後に来るが、これもパプア言語のそれと一致し、他の地域のオーストロネシア言語では見られない。これらの問題を総合して、理論的に研究する構想がまとまり、25 年度から科学研究費を受託することが決定した新しい研究「言語接触による綺語変化の理論的研究」につながった。

本研究では機能範疇が大きな意味を持つが、上記以外にも機能範疇に関する研究を行った。１つは以前から続いている日本語複合動

詞における後項の文法化である。これは東北大の小川芳樹教授との共同研究であるが、成果を和文と英文で出版した。そこでは後項が機能範疇化し、助動詞になったり、目的語を認可できなくなる現象を扱った。また日本語における接辞　中止について、機能範疇の観点から研究を行い、アメリカ合衆国と日本の招待講演で口頭発実した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）

① Kunio Nishiyama, The development of Japanese *no*: Grammaticalization, degrammaticalization, or neither? 9th Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAFL9), MIT Working Papers in Linguistics. 掲載確定.　要旨査読有

② Kunio Nishiyama and Yoshiki Ogawa, Auxiliation, atransitivity, and transitivity harmony in Japanese V-V compounds, Interdisciplinary Information Sciences 20, 2014, 71-101.　査読無

③西山國雄, 分散形態論, 『レキシコンフォーラム６』, 影山太郎(編), ひつじ書房, 2013, 303-326.　査読無

④西山國雄･小川芳樹, 複合動詞における助動詞化と無他動性, 遠藤喜雄（編）, 『世界に向けた日本語研究』, 開拓社, 2013, 103-133. .　査読無

⑤ Kunio Nishiyama, Decomposing Demonstratives and Wh-words, JELS 30, 2013, 159-165.　査読無

⑥西山國雄, 活用形の形態論、統語論、音韻論、通時, 三原健一・仁田義雄(編)『活用論の前線』, くろしお出版, 2012, 153-189.　査読無

⑦Kunio Nishiyama, From Second Position Clitic to Multiple Agreement: Grammaticalization in Languages in Eastern Indonesia, 明海大学大学院応用言語学研究科紀要 14, 2011, 39-47. 査読無

⑧Kunio Nishiyama, Conjunctive agreement in Lamaholot, Journal of Linguistics 47, 2011, 381-405.　査読有

〔学会発表〕（計 18 件）

①西山國雄, 日本語動詞の形態構造, レキシコン研究会, 2015 年 2 月７日, 慶応大学（東京都港区）.

②西山國雄, Verbal Coordination in Japanese from the Perspective of Suspended Affixation, 津田塾大学百語文化研究所言語研究の会」招待講演, 2014 年 12 月 20 日, 津田塾大学（東京都小平市）.

③西山國雄, 三層構造から見た日本語動詞の活用形 , 日本英語学会,シンポジウム「動詞句とその周辺をめぐって： 語彙範疇と機能範疇の役割」, 2014 年 11 月 9 日, 学習院大学（東京都豊島区）.

④西山國雄, ラマホロト語の所有名詞句の通時と共時, 東北大学大学院情報科学研究科「言語変化変異研究ユニット」主催　ワークショップ「コーパスからわかる言語変化と言語理論」 , 2014 年 9 月 9 日, 東北大学（宮城県仙台市）.

⑤西山國雄, ラマホロト語の派生形態論と所有名詞句, レキシコン研究会, 2014 年 5 月 31 日, 慶応大学（東京都港区）.

⑥ 西 山 國 雄 , The syntax of information structures in Lamaholot, オーストロネシア諸語の情報構造に関する国際ワークショップ, 2013 年 12 月 13 日, 東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所（東京都府中市）.

⑦ Kunio Nishiyama, The development of Japanese no: Grammaticalization, degrammaticalization, or neither? 9th Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAFL9), 2013 年 8 月 25 日, ニューヨーク州イサカ（アメリカ合衆国）.

⑧西山國雄, 内的要因か、外的要因か、両方か？－東インドネシア言語の一致形態素の発達－, 日本言語学会, 2013 年 6 月 16 日, 茨城大学（茨城県水戸市）.

⑨西山國雄, アジアとアフリカの言語地域：導入, 日本言語学会, 2013 年 6 月 16 日, 茨城大学（茨城県水戸市）.

⑩西山國雄, 準体助詞「の」の発達：文法化・脱文法化分析の検証と再構築, Ninjal Typology Festa 2013, 2013 年 3 月 24 日, 国立国語研究所（東京都立川市）.

⑪西山國雄, 名詞節の発達：日本語とフィリピン言語の平行性, インドネシア言語研究会, 2013 年 3 月 6 日, 東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所（東京都府中市）.

⑫西山國雄, Decomposing Demonstratives and Wh-words, 招待発表,日本英語学会, 2012 年 11 月 11 日, 慶応大学（東京都港区）.

⑬ Kunio Nishiyama, Japanese Verbal Morphology in Coordination, Workshop on Suspended Affixation, 2012 年 10 月 27 日, ニューヨーク州イサカ（アメリカ合衆国）.

⑭西山國雄, 活用形の形態論、統語論、音韻論, 招待講演,中央大学人文科学研究所「言語の理解と産出」チーム・公開研究会, 2012 年 3 月 10 日, 中央大学（東京都八王子市）.

⑮Kunio Nishiyama, Possessive Constructions in Lamaholot, Topics in Indonesian Languages, 2012 年 2 月 18 日, 東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所（東京都府中市）.

⑯西山國雄, From Second Position Clitic to Multiple Agreement: Grammaticalization in Languages in Eastern Indonesia, 明海大学応用言語学セミナー：「言語の多様性と普遍性」, 2011 年 12 月 17 日, 明海大学(千葉県浦安市).
⑰ 西山國雄, 分散形態論, 招待講演, Morphology Lexicon Forum 2011, 2011 年 9 月 24 日, 大阪大学（大阪府豊中市）.
⑱ 西山國雄, A Tripartite Structure for Demonstrative Pronouns, Deixis in Indonesian Languages, 2011 年 7 月 22 日, 東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所（東京都府中市）.

６．研究組織

(1)研究代表者
西山　國雄（NISHIYAMA　KUNIO）
茨城大学・人文学部・教授
研究者番号：70302320

(2)研究分担者
無し

(3)連携研究者
無し